

中 学 校

平成 2 8 年度

教育研究員研究報告書

社 会

東京都教育委員会

目次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究の仮説	2
IV	研究の方法	3
V	研究の内容	5
1	思考力・判断力・表現力を高める学習指導について	5
2	社会的事象を多面的・多角的に捉える力を伸ばす学習指導の工夫	7
3	検証授業	10
(1)	地理的分野	10
(2)	歴史的分野	15
VI	研究の成果	22
VII	今後の課題	23

思考力・判断力・表現力を高める学習指導の工夫

I 研究主題設定の理由

本研究では、生徒の思考力・判断力・表現力を高めるためには、社会的な事象を多面的・多角的に捉える力を伸ばす学習指導の工夫が必要と考え、本研究主題を設定した。

その理由として、以下の二点を挙げる。

第一に、現行学習指導要領の社会科の目標の中に、「広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察」とある。社会的な事象は、どの立場にあるかによって、その捉え方や判断が異なってくる。多面的・多角的に社会事象を捉えることで、考察や構想を深めることができ、思考力・判断力・表現力を高めることができると考えられる。

第二は、「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」（平成28年8月26日文科科学省）では、「身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教員と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくこと」とあり、深い理解に至るには、多面的・多角的に捉えることが重要と考えるからである。次期学習指導要領等がこのような改訂を目指す背景には、AI（人工知能）の進化など、情報化・グローバル化が一層進展し、将来の変化を予測することが困難な時代の中で多様な価値観を受け入れ、より良く課題を解決に導いていく必要があるからだと推察される。社会に主体的に参画する資質・能力を育成するためには、今まで以上に広い視野に立って多面的・多角的に社会的な事象を捉えることを視野に入れ、対話を重ねたり、見方・考え方を働かせて思考を深めたりすることが大切である。

また、本研究では、生徒が定期考査や授業中の活動において、用語や語句を記述することはできても、論述問題に対する苦手意識が強く、諦めてしまうことがみられることの要因の一つに、社会的な事象を多面的・多角的に捉え、考察することに課題があるのではないかと考えた。本研究のこれまでの授業において、一人一人の生徒が資料に基づいて考察することや、複数の生徒による話し合いなどの場を授業の中に計画することはあるが、生徒の様子をみると、生徒同士の話し合いがかみ合っていなかったり、教師が求めていることとは異なる視点で話し合いが行われていたりする授業事例が挙げられた。このような話し合い活動は、話し合いの視点が不明確であったことから、論点が焦点化されなかったり、一部の生徒の意見に流されてしまったりすることが考えられ、生徒同士による思考の広がりや深まりを阻害し、社会的な事象を一面的に捉えてしまうおそれがあるのではないかと考えた。そこで、何について考え、意見するのか、その視点を明確にすることが大切であると考え、授業において生徒が何に視点を置き、どのように社会的な事象を捉え、複数の考えを関連付けていくべきなのかを示すことで、生徒は社会的な見方・考え方を基に社会的な事象を多面的・多角的に捉えることができ、思考力・判断力・表現力を育むことへつながっていくのではないかと考えた。

社会的な見方・考え方を身に付け、多様な人との対話で考えを広げたり深めたりすることは、小学校で培った「社会的な事象を比較・関連付け・総合して見たり考えたり、社会的な事象を空間

的、時間的に理解したり、公正に判断したり多面的に捉えたりできる」力を更に発展させていくことにもなる。そして、中学校で多面的・多角的な見方・考え方を身に付けることができれば、自ら考えて表現することが多くできるようにもなり、社会的事象により深く向き合うことができる。また、義務教育で身に付けたこれらの力を基盤として高等学校で思考力・判断力・表現力を更に育成することは、主体性をもって多様な人々と協働していくことにもつながると考え、本主題を設定した。

II 研究の視点

本研究は、教科や分野、単元のねらいを達成するために、中学校社会科の指導の改善・充実を図ることを目的として、研究主題を「思考力・判断力・表現力を高める学習指導の工夫」と設定し、次の3点を研究の視点とし、学習指導の工夫の研究を行った。

- ① 「社会的事象を多面的・多角的に捉える力」の定義を明確にする。
- ② 「社会的事象を多面的・多角的に捉える力」を伸ばすための学習指導の工夫を具体的に示す。
- ③ 各分野の特質やねらい、生徒の実態に合わせて、「社会的事象を多面的・多角的に捉える力」を伸ばすための授業を実践する。

III 研究の仮説

本研究では、学習指導の工夫として、「社会的な見方・考え方」を意識するとともに、「対話的な学び」を授業に取り入れることで、生徒の「社会的事象を多面的・多角的に捉える力」を伸ばし、思考力・判断力・表現力を高めることができる。と仮説を立てた。

東京都教育委員会が実施した「児童・生徒の学力向上を図るための調査」（平成25年度から平成27年度まで）では、「中学校社会科の観点ごとの正答率の推移」を整理すると、実施年度により教科の内容に関する正答率は異なるものの、思考・判断・表現に関する正答率は、平成25年度の46.8%に対して、平成26年度が48.7%、そして平成27年度が55.5%と上昇している。

また、「各教科の授業の内容が分かる要因について」の結果において、「自分で考え、考えたことを発表する授業が多いから」と答えた生徒の割合は、平成25年度が17.2%、平成26年度が20.7%、平成27年度が23.5%と、「お互いに意見を出し合ったり学び合ったりする授業が多いから」と答えた生徒の割合は、平成25年度の18.0%から平成26年度は19.9%、そして平成27年度は25.2%と、それぞれ上昇している。

本研究では、これらの関連性に着目し、現在行われている言語活動の充実に対する取組が、一定の成果をあげているものの、授業を通して課題として感じている点にとして以下の3点が挙げられた。

- ① 自分の考えに自信がもてず、自分の意見を積極的に発言することができない。
- ② 資料の見方や課題の捉え方などが十分に理解できず、すぐに答えを求めてしまう。
- ③ 様々な視点から社会的事象を考察することが十分に行えず、話し合いが深まらず、自分の意見を一方的に主張したり、他者の意見を十分に受け入れたりすることができない。

これらのことから、現在授業で取り入れている言語活動等は必ずしも適切な取り入れ方とは言えない場合があり、生徒の思考力・判断力・表現力の向上を図っていく上で課題があり、生徒一

人一人の思考力・判断力・表現力の更なる向上を図るため、今まで以上に「社会的な見方・考え方」を身に付けた生徒の育成に向けた、きめ細かな授業の工夫が必要である。

また、本研究では、生徒同士の協働、教師と生徒間での対話、グループ同士の話し合いなどの「対話的な学び」を取り入れた学習を積極的に行うことにより、生徒には以下のような変容が期待できると考えた。

- ① 複数の立場・意見を基に、自分の意見を構築・再構成することで、自信をもって、自分の意見を表現できるようになる。
- ② 「社会的な見方・考え方」を意識できるようになり、学びの質が高まり、主体的に課題に取り組めるようになる。
- ③ 複数の立場・意見に触れることで、相互作用のある学びができるようになる。

以上のことから、社会的な事象を多面的・多角的に捉える力を伸ばすために、「社会的な見方・考え方」を意識した「対話的な学び」を授業に取り入れることで、生徒の思考力・判断力・表現力を高められると仮説を設定した。

IV 研究の方法

○以下の資料を参考に文献研究を行う。

- ・「児童・生徒の学力向上を図るための調査報告書」(東京都教育委員会、平成 25 年～平成 27 年)
 - ・中学校学習指導要領解説社会編 (文部科学省 平成 26 年 1 月一部改訂)
 - ・社会科などで育成すべき資質・能力の整理 (たたき台案)
(教育課程部会社会地理歴史・公民ワーキンググループ 平成 28 年 2 月 8 日)
 - ・社会科、地理歴史科、公民科における「社会的な見方・考え方」のイメージ (案)
(教育課程部会社会地理歴史・公民ワーキンググループ 平成 28 年 5 月 26 日)
 - ・「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」
(中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 平成 28 年 8 月 26 日)
 - ・小学校学習指導要領 (文部科学省 平成 27 年 3 月一部改正)
- 検証授業や各学校での研究員の取組で得られた成果と課題をまとめる。

【研究構想図】

教科の目標より

広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

生徒の実態

「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の平成 25 年度から 27 年度までの観点ごとの正答率の推移を見ると、社会的な思考・判断・表現の正答率が、平成 25 年度から 27 年度にかけて 8.7 ポイントと上昇している。この要因として、「自分で考え、考えたことを発表する授業が多いから」や「お互いの意見を出し合ったり、学び合ったりする授業が多いから」と答えた生徒の割合も約 6～7 ポイント上昇していることが関連していると捉えられる。一方で、授業を通して感じている様子として、「自分に自信がなく、自分の意見を表現すること」「他者の意見を生かして自分の考えを広げたり深めたりすること」などに課題がみられる。

研究主題

思考力・判断力・表現力を高める学習指導の工夫

研究の視点

- ① 社会的な事象を多面的・多角的に捉える力の定義を明確にする。
- ② 社会的な事象を多面的・多角的に捉える力を伸ばすための学習指導の工夫を具体的に示す。
- ③ 生徒の実態に合わせて、社会的な事象を多面的・多角的に捉え、考察する力を伸ばすための授業を実践する。

研究の仮説

「社会的な見方・考え方」を意識した「対話的な学び」を授業に取り入れ社会的な事象を多面的・多角的に捉える力を伸ばすことができれば、生徒の思考力・判断力・表現力を高められるだろう。

研究の方法

- 以下の資料を参考に文献研究を行う。
- ・「児童・生徒の学力向上を図るための調査報告書」（東京都教育委員会、平成 25～27 年度）
 - ・中学校学習指導要領解説社会編（文部科学省 平成 26 年 1 月一部改訂）
 - ・社会科などで育成すべき資質・能力の整理(たたき台案)
(教育課程部会社会地理歴史・公民ワーキンググループ 平成 28 年 2 月 8 日)
 - ・社会科、地理歴史科、公民科における「社会的な見方・考え方」のイメージ(案)
(教育課程部会社会地理歴史・公民ワーキンググループ 平成 28 年 5 月 26 日)
 - ・次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ
(中央教育審議会 初等中等教育分科会教育課程分科会 平成 28 年 8 月 26 日)
 - ・小学校学習指導要領 社会科（文部科学省 平成 27 年 3 月一部改正）
- 検証授業や各学校での研究員の取組で得られた成果と課題をまとめる。

V 研究の内容

1 思考力・判断力・表現力を高める学習指導について

社会的事象を多面的・多角的な見方や考え方、国際的な視野という空間的な広がりといった複数の側面・立場から捉え、自分や集団の考えを考察したり構想したりする力を伸ばすことが、思考力・判断力・表現力の伸長につながると考えた。

(1) 社会的事象を多面的・多角的に捉える力と思考力・判断力・表現力等の関係を【表1】にまとめた。

【表1】思考力・判断力・表現力などの育成すべき資質・能力の整理

	現行学習指導要領 (平成20年1月)	次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ (平成28年8月)
地理的分野	様々な資料を適切に選択、活用して地理的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力	<ul style="list-style-type: none"> ・地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、地域に見られる課題を把握し、複数の立場や意見を踏まえて選択・判断したりする力 ・趣旨が明確になるように内容構成を考え、自分の考えを論理的に説明したり、それらを基に議論したりする力
歴史的分野	様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力	<ul style="list-style-type: none"> ・歴史に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し、複数の立場や意見を踏まえて選択・判断したりする力 ・趣旨が明確になるように内容構成を考え、自分の考えを論理的に説明したり、それらを基に議論したりする力
公民的分野	様々な資料を適切に収集、選択して多面的・多角的に考察し、事実を正確にとらえ、公正に判断するとともに適切に表現する能力	<ul style="list-style-type: none"> ・社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を現代の社会生活と関連付けて多面的・多角的に考察したり、現代の諸課題について公正に判断したりする力 ・他者の主張を踏まえたり取り入れたりして思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力

【表1】より、「多面的・多角的に考察」という部分は、三分野共通して継続されている部分であり、思考力・判断力・表現力を高める上で重要な考え方である。そこで、【表1】のような力を身に付けさせるためには、授業者が生徒に資料提示の方法などを工夫したり、多面的・多角的に考える視点を与えたりするなど、生徒の思考の過程を整理していくことが必要となると考えた。

(2) 社会的事象を多面的・多角的に捉える力について

「社会的事象を多面的・多角的に捉える力」とは、複数の側面・立場から社会的事象を捉える力である。複数の側面・立場から社会的事象を捉える力とは、各分野の特質を考慮し、社会的事象の意味、意義を解釈したりする学習や、事象の特色や事象間の関連を説明したりする学習などにおいて必要な力であり、学習の中で更に培われるものである。社会的事象を多面的・多角的に捉える力を育成するためには、各分野の特質を踏まえ、社会的な見方・考え方を働かせ、対話的な学びを行うことが重要であると考えた。

ア 社会的な見方・考え方

現行学習指導要領の改善の基本方針に、「社会的な見方や考え方を成長させることを一層重視する方向で改善を図る」とあり、社会的な見方・考え方を踏まえて、学習指導を行っていくことは重要である。「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」では、社会的な見方・考え方について「課題解決的な学習において、社会的事象などの意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して解決に向けて構想したりする際の「視点や方法」とある。本研究で、中学校社会の社会的な見方・考え方を【表2】にまとめ、その視点を基に学習指導を行っていくこととした。

【表2】社会的な見方・考え方（案）

	社会的な見方・考え方の視点例
地理的分野	<ul style="list-style-type: none"> ○位置や分布に関わる視点（絶対的、相対的、規則性・傾向性、地域差 など） ○場所に関わる視点（自然的、社会的 など） ○人間と自然の相互依存関係に関わる視点（環境依存性、伝統的、改変、保全 など） ○空間的相互依存作用に関わる視点（関係性、相互性 など） ○地域に関わる視点（一般的共通性、地方的特殊性 など）
歴史的分野	<ul style="list-style-type: none"> ○時系列に関わる視点（時期、年代 など） ○諸事象の推移に関わる視点（展開、変化、継続 など） ○諸事象の比較に関わる視点（類似、差異、特色 など） ○事象相互のつながりに関わる視点（背景、原因、結果、影響 など）
公民的分野	<ul style="list-style-type: none"> ○現代社会を捉える視点（対立と合意、効率と公正、個人の尊重、自由、平等、選択、配分、法的安定性、多様性 など） ○社会に見られる課題の解決を構想する視点（対立と合意、効率と公正、民主主義、自由・権利と責任・義務、財源の確保と配分、利便性と安全性、国際協調、持続可能性 など）

イ 対話的な学び

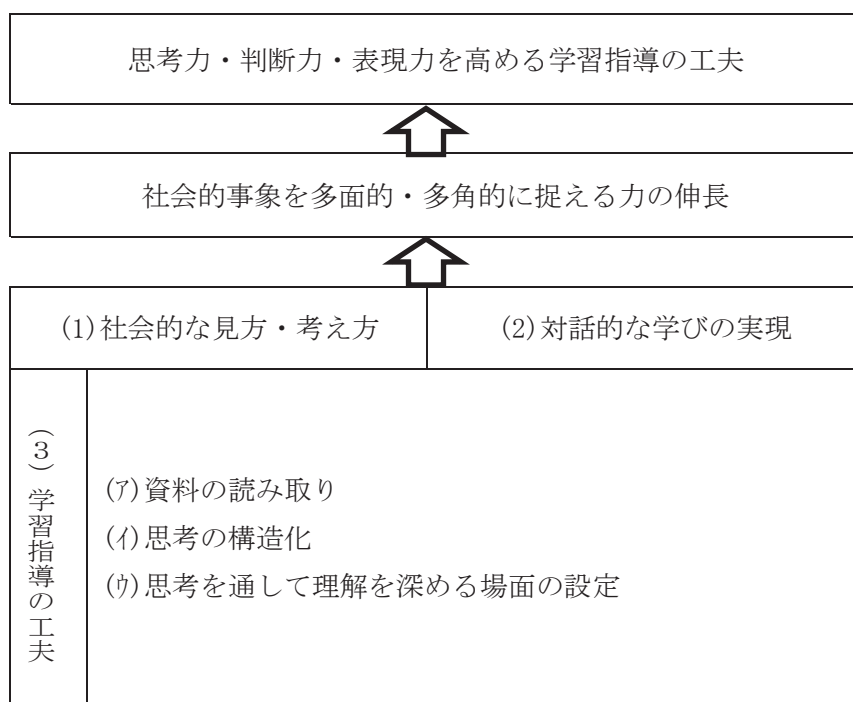
現行学習指導要領解説社会編では、思考力・判断力・表現力等を育むための「学習活動の基盤は言語能力であり、その育成のためには言語活動の充実が不可欠になってくる。」と述べている。そして「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」では、「話合いの指導が十分に行われずグループによる活動が優先し内容が深まらないといった課題が指摘される」とあり、深い学びとの関わりに留意し、その改善を図る」とあり、対話的な学びを通して、言語活動を行っていくことが明記されている。

本研究では、対話的な学びは以下の二つの学びから成り立つのではないかと考えた。

- ① 他者との協働や外界との相互作用のある学び
※ 自己や先哲の考え、資料との対話も含む
- ② 複数の立場・意見を基に自分の考えを構築できる学び

2 社会的事象を多面的・多角的に捉える力を伸ばす学習指導の工夫

生徒の思考力・判断力・表現力を高めるためには、社会的事象を多面的・多角的に捉える力を伸ばすことが重要であり、そのためには、「社会的な見方・考え方」を働かせ、「対話的な学び」を行うことが重要であると述べた。このことから、この二つの視点を成立させる工夫として、本研究では《資料の読み取り》《思考の構造化》《思考を通して理解を深める場面の設定》を挙げ、研究の内容を【図1】のような構造で意識し、授業に取り組んだ。



【図1】本研究内容の構造図

以下に「社会的な見方・考え方」、「対話的な学び」それぞれの視点における具体的な内容を掘り下げる。

(1) 社会的な見方・考え方を取り入れる工夫

「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」で指摘されている、「社会的な見方・考え方」を働かせた思考力・判断力について、次の【表3】にまとめた。

【表3】「社会的な見方・考え方」を働かせた思考力・判断力

	思考力・判断力
地理的分野	<p><社会的事象の地理的な見方・考え方></p> <ul style="list-style-type: none">・社会的事象を、位置や、空間的な広がりに着目して捉える・地域の環境条件や他地域との結び付きなどを地域という枠組みの中で人間の営みと関連付ける <p>○考察：地域の特色や相互の関連を多面的・多角的に考察する力</p> <p>○構想：地域に見られる課題の解決に向けて、複数の立場や意見を踏まえて選択・判断する力</p>
歴史的分野	<p><社会的事象の歴史的な見方・考え方></p> <ul style="list-style-type: none">・社会的事象を時期、推移や変化などに着目して捉える・類似や差異などを明確にしたり、事象同士を因果関係などで関連付けたりする <p>○考察：時代の転換の様子や各時代の特色を多面的・多角的に考察する力</p> <p>○構想：歴史に見られる諸課題について、複数の立場や意見を踏まえて選択・判断する力</p>
公民的分野	<p><現代社会の見方・考え方></p> <ul style="list-style-type: none">・社会的事象を政治、法、経済などに関わる多様な視点（概念や理論など）に着目して捉える・よりよい社会の構築に向けて、課題解決のための選択・判断に資する概念や理論などと関連付ける <p>○考察：社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察する力</p> <p>○構想：複数の立場や意見を踏まえて構想する力</p>

以上から、三分野に共通する「社会的な見方・考え方」を働かせた思考力・判断力とは、社会的事象などの意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、解決に向けて構想したりすることであり、その際の視点や方法が「社会的な見方・考え方」である。

(2) 対話的な学びの実現

言語活動の充実は、本研究において重視する学習活動の基盤である。ただし、表面的には活発な意見が交わされているように見える授業であっても、生徒が他者の意見を取り込むことが

できていなければ、真の意味で言語活動の充実が実現されているとは言えない。

前述したように、社会的事象を捉えるための対話を充実させるためには、地理的分野には自然的・社会的位置に関する視点、歴史的分野には時系列や変化に関わる視点、公民的分野には現代社会を捉える視点などが必要である。しかし、その前提として、基礎的・基本的な知識は欠かすことができない。また、その基礎的・基本的な知識を既習内容や生徒の経験と融合させることで、生きた知識として生かされることになる。そして、このことは、学習過程の中に話し合い活動等を必ず入れなければならないとするものではない。教師は、様々な授業形態を目的や実態に応じて選択することが大切である。対話的な学びの実現に向けては、生徒が個人で思考する時間の保障や対話の目的の理解の促進、生徒による自己の考えと他者の考えとの比較・関連付け、因果関係の模索等を通して、考えを広げ深めていけるようにしていくことが大切である。

(3) 社会的な見方・考え方を取り入れた対話的な学びの実現における学習指導の工夫

本研究では、社会的な見方・考え方を取り入れた対話的な学びとして、「社会的な見方・考え方」と「対話的な学び」の双方を重要視している。そこで、双方を意識して指導をする際に必要である視点として、「資料の読み取り」「思考の構造化」「思考を通して理解を深める場面の設定」とし、以下に具体的な手だてを示す。

ア 資料の読み取り

社会科の授業において、資料の提示の仕方は重要である。

① ねらいに沿った視点の提示

資料を提示する際に、【表2】にある「社会的な見方・考え方」の視点を提示したり、発問の中に加えたりする。例えば、過疎問題の解消を考察させるとき、視点を提示していなければ強制的に移住させるような案を出してみたり、経済面を無視した建設などの思案に陥ったりすることもある。これに対し、教師があらかじめ資料を読み取る視点を提示することで、生徒が社会的な見方・考え方をもって資料を読み取ったり、解釈を加えたりすることができる。このことにより、生徒は資料から読み取る内容が明確になり、自分の考えを構築しやすくなる。そして、生徒は読み取った情報や自分の考えを基に対話に参加できるため、対話的な学びを活性化させる有効な手だてになると考えた。

② 多面的・多角的に捉える場面の設定

資料について、多面的・多角的な思考につながるような視点を教師が適切に整理して提示することで、生徒の思考を補助することができる。例えば、一つの社会的事象を、経済や文化など複数の側面から捉えるようにしたり、未成年や高齢者など多角的な立場から捉えるようにしたりすることや、社会的事象の要因を考察する際に、例えば政治的要因なのか経済的要因なのかという軸と、国内の要因なのか国際的な要因なのかという軸との組み合わせで4象限を作り出すような工夫である。このようにすることで、生徒は自分が最初に注目した立場以外の立場の存在に気付くことができるなど、多面的・多角的な思考を促すことができる。

イ 思考の構造化

対話的な学びにおいて、自己と他者との考えを比較した結果や、社会的事象の因果関係について考察した結果等を、改めて全体が俯瞰できるように視覚的に表すことで、学習全体を通し

た考えの再構築ができるのではないかと考えた。そこで、ワークシートや板書を用いて思考を整理できるようにしていく。多くの授業では、1 単位時間の授業において、授業の思考の流れを示す板書計画がなされている。ICT 機器を活用するなど、改めて板書計画を精査し、ワークシートと正対させる必要があると考えた。

ウ 思考を通して理解を深める場面の設定

① 生徒の思考過程における工夫

一つの資料に対して、様々な資料を比較し、相違点を抽出させたり、因果関係を考えさせたりすることにより、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多面的・多角的に考察し、思考を深めていくことができると考える。

② 柔軟な対話の形態

対話の形態については、発達段階に応じて、学習過程を「個→小集団→全体→個」と行うことで、生徒が他者の思考した結果を参考にしながら過程を深めていくことができると考えられる。しかし、生徒の思考は、初発の一つの考えが新しい考えに変わるといった単純なものではなく、他の生徒の意見やつぶやきなどに刺激されながら、微修正を絶えず行うものとする。このことより、個々の話合いのみではなく、いくつかの視点ごとのグループ分けなども、適宜用い、思考を深める場面を設定していく必要があると考えた。

3 検証授業

(1) 地理的分野

ア 単元名 (2)日本の様々な地域 ウ 日本の諸地域
(ウ)人口や都市・村落を中核とした考察 「関東地方」

イ 単元の目標

関東地方の地域の人口の分布や動態、都市・村落も立地や機能に関する特色ある事象を中核として、それを人々の生活や産業等と関連付け、過疎・過密問題の解決が地域の課題になっていることを考え、関東地方の地域の地理的特色を捉える。

ウ 単元の評価規準（具体的な評価規準）

ア 社会的事象への 関心・意欲・態度	イ 社会的な思考・判 断・表現	ウ 資料活用の技能	エ 社会的事象につ いての知識・理解
①人口や都市・村落を 中核とした考察の仕 方を基に関東地方の 地域的特色に対する 関心を高め、それを 意欲的に追究し、捉 えようとしてようと している。	①関東地方の地域の特 色を、人口や都市・村 落を中核とした考察 の仕方を基に、多面 的・多角的に考察し、 その過程や結果を適 切に表現している。	①関東地方の地域の特 色に関する様々な資 料を収集している。 ②収集した資料から、 関東地方の地域の特 色について有用な情 報を適切に選択して いる。	①関東地方について 人口や都市・村落を 中核とした考察の仕 方を基に地域的特色 を理解し、その知識 を身に付けている。

		③適切に選択した情報を基に、関東地方の地域的特色について読み取ったり図表などにまとめたりしている。	
--	--	---	--

エ 単元について

大項目(2)日本の様々な地域は、大項目(1)世界の様々な地域の学習成果を踏まえ、日本及び日本の諸地域の地域的特色を捉える学習を通して、国土の認識を深めることをねらいとしている。このねらいを達成するため、「日本の諸地域」など四つの中項目から構成されている。

中項目は、日本を幾つかの地域に区分し、それぞれの地域的特色ある地理的事象や事柄を他の事象と有機的に関連付けて追究する活動を通して、日本の諸地域の地域的特色を捉えさせることを主なねらいとしている。この中項目の学習では、「(ア) から (キ) の考察の仕方」を基にして、地域的特色を追究するための適切な課題を設定し、様々な資料を適切に活用して地域的特色を考察し、追究した過程や結果を適切に表現するといった学習活動を、生徒に実際に取り組ませるようにすることが大切である。

小項目の「(カ) 人口や都市・村落を中核とした考察」では、地域の人口の分布や動態、都市・村落の立地や機能に関する特色ある事象を中核として、それを人々の生活や産業などと関連付け、過疎・過密問題の解決が地域の課題になっていることなどを考察し、地域的特色を捉えるようにする。

この単元は、地理学習の後半部分という位置付けにある。そのため、世界の様々な地域をはじめ、これまで培ってきた地理的な見方・考え方を一層高めていくことが大切である。地理的分野における思考力・判断力・表現力を付けるために、関東地方・東京都の特色、都市問題、都市圏の成立、産業の特色等の人口や都市・村落に関する特色ある地理的事象への着目・理解を図る際に、対話的な学びを取り入れている。習得した知識を関連付けながら、思考力・判断力・表現力を高める取組をしていきたい。

オ 単元指導計画と評価計画

項目	学習内容、活動	学習活動に即した具体的な評価規準(評価方法)
関東地方の生活の舞台	<ul style="list-style-type: none"> ・関東地方の土地利用の様子について理解する。 ・関東地方の人口集中が気候に影響を与えていることを考察する。 	イー① 関東地方は人口が集中している理由について考える。 (ワークシート) エー① 都心の人口集中が気候に影響を与えていることを理解する。 (ワークシート)

<p>関東地方の人々の営み</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・関東地方各地と東京都、関東地方と他地域との結び付きについて、人口と産業の特色などに関連付けて考察する。 	<p>イー① 東京都に集中しているものをまとめる。 (発言、ワークシート)</p> <p>ウー① 首都である東京都にはどのような役割があるか資料を基に考え表現する。 (ワークシート)</p>
<p>首都・東京と各地との結び付き</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都に様々な機能が集中し、東京都から各地に情報が発信されていることを捉える。 ・東京都の都心部と郊外との関係を多面的に考察する。 	<p>イー① 東京都に様々な機能が集中する理由を考察し、情報発信の中心になっていることについて考える。 (発言、ワークシート)</p> <p>ウー② 都心と郊外の結び付きを調べて、その特色を考える。 (ワークシート)</p>
<p>各地との結び付きで成り立つ産業と生活</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・関東地方の工業について、臨海部と内陸部との違いを捉える。 ・関東地方の農業について、首都圏の発達と関連付けて理解する。 	<p>アー① 京浜工業地帯が発達したあと、北関東工業地域が形成されたことについて意欲的に調べる。 (観察)</p> <p>エー① 近郊農業がさかんな理由を理解する。 (ワークシート)</p>
<p>世界への窓口、日本の中心</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各種資料から、関東地方と日本各地や世界との結び付きを多面的に捉える。 	<p>イー① 関東地方と全国各地の結び付きには、どのような特色があるかを考える。 (発言内容の観察、ワークシート)</p> <p>ウー② 関東地方と日本各地や世界の結び付きに関する資料を収集している。 (観察)</p>
<p>関東地方のまとめ①</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの学習を踏まえて、関東地方の地域的特色を多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現する。 	<p>アー① 過疎地方の問題点や過密地域に人々が集まる理由について意欲的に追究し、捉えようとしている。 (観察)</p> <p>イー①</p>

		過疎地方の問題点や過密地域に人々が集まる理由について多面的・多角的に考察している。 (観察、ワークシート)
関東地方の まとめ② (本時)		イー① 過疎化対策を切り口に、各地域の特色について考察し、構想した内容を適切に表現している。 (観察、ワークシート) エー① 関東地方の地域的特色について理解し、その知識を身に付けている。 (ワークシート)

カ 本時(全7単位時間中の第7時)

(ア) 本時の目標

関東地方の地域的特色を多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現する。

(イ) 本時の展開

※ [] の部分は思考力・判断力・表現力を高める学習指導の工夫である。

	学習内容・学習活動	指導上の留意点	・評価規準(評価方法)
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・本時のねらいや流れを説明する。(2分) ○関東地方の地域的特色を人口中心の視点で復習する。(3分) ・過密地域になぜ人が集まるのかを復習する。 ・過疎地域の課題を復習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・過密地域に人が集まる理由と過疎地域の問題点を教員と生徒の対話を通じ復習する。 	
展開	<ul style="list-style-type: none"> ○「自分たちの地域が行う過疎化を止めるための取組と、自分たちの地域の良さを知ってもらおう。」 ・各地域の住民になったつもりで、地域的特色についてまとめる。 ・個人で考察する。(5分) ・様々な立場に分ける。 (例) 東京都奥多摩町の住民の立場 	<ul style="list-style-type: none"> ・過疎地域の分布の読み取りを教員と生徒の対話を通じ捉えさせる。 ・司会、記録、発表者などの役割分担を決め、活動させ 	<ul style="list-style-type: none"> ・イー① 過疎地域の課題

展 開	<p>(例) 東京都三宅島の住民の立場</p> <p>(例) 群馬県嬲恋村の住民の立場</p> <p>(例) 千葉県南房総市の住民の立場</p> <p>(例) 埼玉県東秩父村の住民の立場</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キーワードを必ず使い話し合う。 <p>(農業、漁業、林業、IT、観光 自然、都市部との交流、交通網、その他)</p> <p>※ キーワードは2つ以上使う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3～4人のグループで考察する。 (15分) <p>・関東地方の地図に各グループがまとめた地域を示しながら、クラス全体に対して発表を行う。</p>	<p>る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タイマーを使用し、時間を意識させる。 ・各グループはホワイトボードに考察した内容を記入する。 ・各グループの担当地域の基礎データ(人口、面積、主な産業など)を配布する。 ・発表に対して肯定的な態度で臨むよう指導する。 	<p>解決策を考察し、適切に表現している。</p> <p>(授業観察、ワークシート)</p>
ま と め	<p>○本時の学習内容について振り返る。 (10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに、班やクラスの意見を踏まえて、自分の言葉で関東地方の地域的特色をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの学習を振り返るように助言する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・エー① 関東地方の地域的特色を理解できている。

キ 地理的な見方・考え方を取り入れた対話的な学びの実現における学習指導の工夫

① 資料・情報の読み取り

本検証授業の中心的部分である課題を考察する場面で、地理的な見方・考え方の視点を整理し、各グループを様々な立場に振り分けた。それぞれ違う立場から、地域に見られる課題解決に向けてについて考え、違う立場のグループの発表を聞き選択・判断することで多面的・多角的に捉える力を高める工夫とした。また、まとめの部分でグループやクラスの意見を踏まえて自分の意見を再構成していくことが、思考を通して理解を深めていくことにつながると考えた。

② 思考を通して理解を深める場面の設定

本検証授業では、導入で過密地域に人が集まる理由と過疎地域の問題点を教員と生徒の対話で確認を行った。この授業の中心的部分である課題を考察する場面では「個→小集団→全体→個」という学習形態をとった。この学習形態の中で資料との対話、生徒同士の対話、多角的な立場の視点による対話を取り入れ、複数の情報から空間的相互依存作用に気付くようにした。

ク 成果と課題

本検証授業では、生徒が関東地方の地域的特色を多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現できるように計画した。その際、地理的な見方・考え方を意識した視点の提示や、視点をういた対話場面の設定、生徒と資料、生徒同士の対話を通して考察したことの共通理解を図ることで、グループで多面的・多角的に物事を捉えられるようにした。また、授業の終末

の活動において班やクラスの意見を踏まえて自分の考えの再構成を図った。

(ア) 成果

生徒が考察を重ね、多面的・多角的に地理的情報を考えるために地理的な見方・考え方をを用いた資料の読み取りは欠かせないことが分かった。授業では、過疎地域の分布に視点をあて資料の読み取りを行い、生徒が読み取ったことをクラス全体で確認を行った。これは、次の考察の場面における課題解決とつながっており、直前の既習内容を対話に生かすことができ、授業内での思考の連続性を生み出していた。

対話場面においては、あらかじめ多面的・多角的な対話になるように、生徒ごとに異なる視点を与えて考察する取組をした。生徒からは様々な立場から物事を考えることができるきっかけになったという感想があり、違う地域を担当したグループの意見を聞くことで、多面的・多角的な考察につながった。

また、対話における場面設定も多面的・多角的な対話につながる大きな要因となった。検証授業では、課題についてまず個人で考察し、その後にグループでの考察や発表につなげた。自分の意見をもって授業に臨むことで、他者の発表や意見との思考の比較・類推が行われ、自分の意見を再構成する生徒の様子がみられた。

今回のような地理的な見方・考え方についての提示は、思考の方向性についてあらかじめ道筋が示されるため、生徒の学習意欲の向上にもつながったことが、検証授業後の生徒の振り返りの記述からも読み取ることができた。

【検証授業後の生徒の振り返りより一部抜粋】

- ・様々な地域や年代の立場から物事を考えることができ、過疎・過密問題の解決が、地域の課題となっていることが分かった。
- ・他の人の意見を聞いて、自分では気が付かなかった人口の分布や動態への意識をもつことができた。
- ・人の意見を聞いて、立地に対する自分の考えに改めて自信をもつことができた。
- ・人口の増加には、交通機関の発達や、物資の流通が関係していることが分かった。

(イ) 課題

課題に迫る視点の一つとして、「人口の流出をどう止めるか?」、「どうしたら定住してもらえるか?」という問いを挙げた。この問いに対して、生徒やグループの中には観光のPRで終わってしまった。地域的特色を捉えるようにするなど課題の明確化を図る工夫をしなければならなかったと感じた。また、事前に話し合いに必要な基礎的な知識などを確認してから話し合うと内容が深まると考えられる。

(2) 歴史的分野

ア 単元名 (2) 古代までの日本 「原始・古代の日本と世界」

イ 単元の目標

(ア) 古代の歴史的事象に対する関心を高め、意欲的に追究して、古代の特色を捉える。

- (イ) 古代の特色や歴史的事象について多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現する。
- (ウ) 古代に関する様々な資料から有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりする。
- (エ) 古代の特色などを、世界の歴史を背景に理解し、その知識を身に付ける。

ウ 単元の評価規準（具体的な評価規準）

ア 社会的事象への関心・意欲・態度	イ 社会的な思考・判断・表現	ウ 資料活用の技能	エ 社会的事象についての知識・理解
<p>①世界の古代文明、日本の古代の社会や政治などに対する関心を深め、意欲的に追究し、古代の特色を捉えようとしている。</p>	<p>①世界の古代文明や宗教のおこり、農耕の広まりと生活の変化や信仰、大和朝廷による統一と東アジアとの関わり、律令国家の確立、貴族社会の発展などを多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。</p> <p>②学習した内容を活用し、その比較や関連付けなどを通して、古代の特色を多面的・多角的に考察し、公正に判断して、その過程や結果を適切に表現している。</p>	<p>①古代文明の発展、古代の国家の成立、大和政権の成立、聖徳太子の政治、律令国家の成立、摂関政治など古代の社会や政治に関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択し、読み取ったり図表にまとめたりしている。</p> <p>②日本と東アジアの交流、遣隋使・遣唐使の派遣など、古代の対外関係に関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択し、読み取ったり図表にまとめたりしている。</p>	<p>①古代文明や宗教がおこったこと、農耕の広まりにより人々の生活が変化したこと、大陸の文物や制度を取り入れながら国家のしくみが整えられたこと、天皇や貴族中心に日本の古代国家が発展していったこと、大陸の影響を受けた文化が栄え、後に文化の国風化が進んだことなどを理解し、その知識を身に付けている。</p>

エ 単元について

この大項目(2)古代までの日本のねらいは、我が国の古代までの特色を、世界の歴史を背景に理解することである。この時期の我が国では、農耕・牧畜が始まって文明がおこり国家が形成されていったという世界の動きの中で、特に東アジアと深い関わりをもちながら、農耕の広まりによる生活の変化、国家の形成と発展、天皇・貴族による政治の展開、文化の発展などの動きが見られた時代である。この大項目は、従前の「(2)古代までの日本」の中項目のアとイを、我が国の古代までの特色を大きく捉えさせる観点から一つにし、三つの中項目からなる大項目として構成されている。

オ 単元の展開 (15 時間扱い)

※ の部分は、指導計画と評価計画のうち今回の検証授業に関わる部分

中項目 (時間数)	学習目標
中項目 1 (8)	<p>人類が出現し、やがて世界各地で古代文明がおこったことや、宗教がおこったことを理解する。</p> <p>日本列島で狩猟・採集を営んでいた人々の暮らしについて考える。</p> <p>日本列島での農耕の広まりによる人々の生活の変化に気付き、国家が形成されていく過程のあらましを東アジアとの関わりを通して理解する。</p>
中項目 2 (3)	<p>7～8 世紀の世界では、東西に大帝国が成立し、シルクロードを通じた国際交流が盛んになったことを理解する。</p> <p>日本では、大陸の文物や制度を積極的に取り入れながら、国家のしくみが整えられたことを理解する。</p>
中項目 3 (4)	<p>天皇や貴族の社会の政治が展開され、古代国家が発展していったことを理解する。</p> <p>国際的な要素をもった文化が栄え、後に文化の国風化が進んだことを理解する。</p>

指導計画と評価計画のうち今回の検証授業に関わる中項目 1 について以下に示す。

項 目	学習内容、活動	学習活動に即した具体的な評価規準 (評価方法)
人類の出現と農耕・牧畜の始まり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人類の進化や、狩猟・採集の生活から農耕・牧畜の生活へと暮らしを進歩させていく過程を調べる。 	<p>ウー①</p> <p>人類の進化について資料を使って調べ、図表などにまとめている。 (観察、ワークシート)</p> <p>エー①</p> <p>人類の進化や、狩猟・採集の生活から農耕・牧畜の生活へと暮らしを進歩させていく過程について理解している。 (ワークシート)</p>
オリエントの古代文明	<ul style="list-style-type: none"> ・ エジプト文明とメソポタミア文明の特色や、文字・暦・数学などが発達した理由について考察する。 ・ エジプト文明とメソポタミア文明の形成過程や特色を理解する。 	<p>アー①</p> <p>古代文明に関する建物業や文化財に関心を持ち、意欲的に追究している。 (ワークシート)</p> <p>イー②</p> <p>古代文明の共通点や、おこった背景について考察し、自分の言葉で適切に表現している。 (観察、発言)</p>

アジアに芽生えた古代文明	<ul style="list-style-type: none"> 世界の文明が、それぞれの地域の人々の知恵や大河などの自然の恵みとともに発展していることを、様々な資料から読み取り整理する。 世界各地でおこった古代文明を比べ、共通する特色を理解する。また、文明地域でおこった儒教や仏教が、アジア各地や日本に広まり、社会や人々に影響を与えたことを理解する。 	<p>ウー① 資料を活用して、中国から日本に伝わった文物の特色やその影響について調べ捉えている。 (ワークシート、発言)</p> <p>エー① 中国文明が日本に与えた影響や、漢の時代の中国と周辺諸国との関係について理解している。 (ワークシート)</p>
大帝国の出現と交流	<ul style="list-style-type: none"> 中国とローマ帝国を結ぶ交通路が開かれた背景や歴史的な役割について考察する。 ローマ帝国で実用的な文化が発展したことや、キリスト教がヨーロッパに広まったことを理解する。 	<p>アー① 古代ローマ文明に関心をもち、意欲的に学習している。 (観察)</p> <p>イー② 資料を通して、ローマの文明がヨーロッパ文化と深く結びついていることを捉え、適切に表現している。 (ワークシート)</p>
旧石器時代・縄文時代の人々の生活	<ul style="list-style-type: none"> 縄文時代の人々の暮らしについて旧石器時代との違いを、住まいや道具などから考察する。 氷河時代の日本列島に、陸続きになった大陸からの旧石器時代の人々が移住してきたことを理解する。 	<p>イー① 縄文時代の人々の生活について、気候変動と関連付け考察している。 (ワークシート)</p> <p>エー① 縄文時代の人々の生活について、資料を使って調べ図表にまとめている。 (ワークシート)</p>

<p>稲作の広まりと人々の生活の変化</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・縄文時代と弥生時代の暮らしの違いについて、道具などから考察する。 ・稲作がもたらした生活の変化について理解する。 	<p>イー①</p> <p>縄文時代と弥生時代の変化や違いを捉え、その理由を推測し、その過程や結果を適切に表現している。</p> <p>(ワークシート)</p> <p>・エー①</p> <p>稲作がもたらした生活の変化について理解している。</p> <p>(ワークシート)</p>
<p>古代中国の歴史書に記された倭</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・倭の支配者たちが中国に使いを送った理由について考察する。 ・女王卑弥呼による邪馬台国の統治の様子について、資料から読み取って整理する。 	<p>アー①</p> <p>倭と中国について意欲的に調べ、その関係性について捉えようとしている。</p> <p>(観察)</p> <p>エー①</p> <p>中国の文献などから、国家が形成されていく過程について捉えている。</p> <p>(ワークシート)</p>
<p>大陸との交流と大和政権の成立</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・現在も残る古墳や渡来人の足跡に関心を高め、その由来や意義を意欲的に調べようとする。 ・近畿地方の豪族が大王を中心に大和政権をつくり、各地に勢力を拡大したことや、渡来人が大陸の優れた技術や漢字・仏像などを伝えたことを理解する。 	<p>ウー②</p> <p>ヤマト王権が日本を統一していく過程について資料から読み取り図表にまとめている。</p> <p>(ワークシート)</p> <p>エー①</p> <p>資料を通して、日本と中・朝鮮半島との交流について理解している。</p> <p>(ワークシート)</p>

カ 本時（全15時間中の第6校時）

(ア) 本時の目標

縄文時代と弥生時代の暮らしの違いについて、当時の道具などから考察し、稲作がもたらした生活の変化について理解する。

(イ) 本時の展開

※ の部分は思考力・判断力・表現力を高める学習指導の工夫である。

	○学習内容 ・学習活動	指導上の留意点	評価規準 (評価方法)
導入	<p>○弥生時代に使用された道具や建物（石包丁、田下駄、高床倉庫、臼、杵、鋤、鋤など）の写真を見て、稲作に関係があることに気付く。</p> <p>T: これらの写真から連想される農作物は何ですか。</p> <p>S: お米、稲</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・板書で本時のねらいを明示し、課題意識をもたせる。 	
<p>本時のねらい：稲作の広まりによって人々の暮らしはどのように変わっていったのか。</p>			
展開	<p>○弥生時代の生活の変化について考察する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・縄文時代と弥生時代の建物、集落、道具、墓などの写真を比べ、どのように変わったのか考える。 <p>※考える活動</p> <p>個人 (1分)</p> <p>小グループ (3～4人×7班) (5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・縄文時代と弥生時代の建物、集落、道具、墓などの写真を比べなぜ変わったのか考える。 <p>※考える活動</p> <p>個人 (1分)</p> <p>小グループ (3～4人×7班) (10分)</p> <p>→学級への発表 (全班) の順番に実施して深める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小グループごとに別々の写真を用意し、話し合わせる。 ・話し合いが進まない班については、注目すべき点に目を向けさせるようなヒントを与え、考えを補助する。 ・話し合った内容をホワイトボードにまとめ、黒板に掲示する。 ・それぞれの班の発表からキーワード (争い・戦争、支配者・身分、中国・朝鮮半島との交流、儀式・豊作への願いなど) を抜き出して板書し、稲作とキーワードを関連付けて整理し、まとめにつなげる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・イー① 縄文時代と弥生時代の変化や違いを捉え、その理由を推測し、その過程や結果を適切に表現している。(ワークシート)

展 開	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの班の発表から出たキーワードを使って、稲作の広まりによって、弥生時代の世の中がどのように変わったのか考察し、まとめる。 ※考える活動 個人（5分）→学級への発表の順に実施して考えを深める。 	<ul style="list-style-type: none"> 各個人で行う作業となるが、学習の進行状況に合わせて、学び合いの形を取ることも認める。 	
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の学習内容について振り返り、分かったこと、感想などをワークシートにまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習内容をまとめたものを板書し、確認を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> エー① 稲作がもたらした生活の変化について理解している。（ワークシート）

キ 社会的な見方・考え方を取り入れた対話的な学びの実現における学習指導の工夫

①資料・情報の読み取り

本検証授業の中心的な部分である、弥生時代の生活について考察する場面では、小グループで縄文時代と弥生時代の建物、集落、道具、墓などの写真を比較して考察する学習活動を取り入れた。これは、本報告書で示した「社会的な見方・考え方（案）」の「考えられる視点例」から特に、「諸事情の比較に関わる視点（類似、差異、特色など）」を重視したためである。また、各グループに、各視点に関する写真資料を提示した話し合いを行うことで、縄文時代から弥生時代の生活の変化を視覚的に捉えられるようにした。

②思考を通して理解を深める場面の設定

本検証授業の中心的な内容である弥生時代の生活について考察する場面では、「個→小集団→全体→個」という学習形態にした。この学習形態の中で自己との対話、資料との対話、生徒同士の対話を取り入れることにより、多面的・多角的な視点から自分の考えを再検討し、更にもう一度その考えを再構築することで、思考の深まりを図った。

ク 成果と課題

本検証授業では、小グループで縄文時代と弥生時代の写真を比較して考察する学習活動を行うことで、稲作のおこりによって、弥生時代にどのような社会の変化が起こったのかについて理解することをねらいとした。本検証授業の成果と課題について、以下にまとめる。

(7) 成果

「社会的な見方・考え方」を重視した「対話的な学び」を授業に取り入れることにより、多面的・多角的に考察することができるようにした。

考察の場面では、各グループにそれぞれ異なる写真資料を提示し、写真資料を比較させることで、当時の生活様式にどのような変化があったのか、なぜそのような変化が起こったのかを

考えさせた。その際に、写真資料において歴史的な見方・考え方について概念の分類ができるような資料選択を行った。生徒は資料と対話することで、当時の生活について既習事項を想起しながら考察を行うことができた。また、生徒同士の対話により、それぞれの考えを関連付け、因果関係をまとめる姿をみることができた。

【グループによる考察後の個人のまとめから一部抜粋】

- ・ 稲（米）や土地をめぐる争いが起こった。
- ・ 収穫量の差から身分の差ができた。
- ・ 他国の文化が伝わったことによって道具が発達した。

また、検証授業後のワークシートの生徒の記述を見ると、対話的な学びを取り入れることにより、自分の考えと他者の考えを比較して、自分の考えを再構成することを生徒が実感していることが分かる。また、複数の意見を比較することにより、思考が深まっているということを感じている生徒が多い。このことより、対話的な学びを継続させることで、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多面的・多角的に考察する力を伸長させることができたと考えられる。

【検証授業後の振り返りから一部抜粋】

- ・ グループで話し合ったことによって、縄文時代と弥生時代の変化について色々な意見が出て、一人では気が付かなかった考えを知ることができた。
- ・ 一人よりもグループの方が、複数意見が出てくるので、弥生時代の世の中の変化についてより広く深く考えられたと思う。
- ・ 少人数で話し合うことで、自分の意見を述べる機会が多くあった中で、資料の見方も知ることができた。

(イ) 課題

グループによっては、読み取ることが難解な写真資料があり、うまく話合いが進まないグループも見られた。生徒の発達段階に応じた資料の精選と、適切な資料の提示方法の工夫に課題があった。生徒が「対話的な学び」を活発に行い、生徒により深い思考をさせるためには、適切な助言をしたり、補助資料を提示したりするなど思考の手助けとなる工夫をすることが必要であったと考えられる。

VI 研究の成果

1 「思考力・判断力・表現力を高める上での、社会的事象を多面的・多角的に捉える力を伸ばすことの有用性

① 「社会的な見方・考え方」を取り入れた学び

本研究では、思考を通して理解を深めるために、様々な資料を提示する授業を計画した。資料によっては、「社会的な見方・考え方」を用いて資料を読み取ることが難解な資料もあったが

思考の過程の整理をし、資料について読み取る視点を教師が事前に提示することで、生徒の思考の整理を補助し、資料を読み取ることができた。また、個人で思考する時間を保障することで生徒と資料との対話が生まれ、資料から読み取ってほしい知識を捉えることができた。生徒が始めに捉える知識は一面的な考えであることが多いが、複数の知識の比較・整理を行う中で、多面的・多角的な思考へつなげることができた。

② 「対話的な学び」による生徒の思考の深化

本研究では学習課題に対して、まずは生徒が自分の考えをもち、その後、グループ（班・学級）での対話を通じて、生徒自身が当初の自分の考えを再検討し、その考えを再構築する場面を設定した。このことで、授業中の発言及びワークシートの記述から生徒の思考が変化していく様子を見ることができた。これは、生徒が自分の考えに対して、同じような意見があることや、他の意見があることを知ることで自身の意見と比較し、より適切な判断ができるようになるという思考の深化を図る効果があることが分かった。

これらのことから、「社会的な見方・考え方」を重視した「対話的な学び」を意識した授業を行うことにより、生徒が社会的事象を多面的・多角的に捉える力を伸張させることが分かった。また、1単位時間の授業や単元の振り返りから、生徒の主体性やコミュニケーション能力の向上にも効果があるということも分かった。思考力・判断力・表現力を高めるためには、資料の読み取り、思考の構造化、思考を通して理解を深める場面の設定を中心とした授業の実践を継続的に行い、生徒に「社会的な見方・考え方」を重視した「対話的な学び」をさせることが重要である。

2 授業改善への取組

生徒一人一人の思考を活用しながら、ねらいに向けた思考の深化を図るために、「社会的な見方・考え方」に重点をおき、資料の読み取りや考察の際に視点を設けることや、「対話的な学び」を意識し、資料との対話、生徒同士及び教師との対話を意図的に用いることが、生徒の思考力を深めていくということが分かった。今後も、ねらいに沿った資料の精選、資料提示の方法及び授業展開の工夫を行うことで、生徒の思考力・判断力・表現力を高めていくことができると考える。

VII 今後の課題

1 生徒の思考力・判断力・表現力に関する評価方法などの検討

指導と評価の一体化という視点からみると、ワークシートなどにより一定の評価はできたものの、資料の読み取りなどを通じて、「社会的な見方・考え方」をどの程度まで身に付けられたかを判断するための指標や、「対話的な学び」における評価規準について、本研究においては十分に追究することができなかつた。今後、生徒の思考力・判断力・表現力に関する評価方法などについての更なる研究が必要だと考えられる。

2 授業展開の精査

検証授業では生徒の思考力・判断力・表現力を高めるための方策として、多面的・多角的な

視点を多く取り入れ、生徒にとって理解しやすい立場を設定するなどの工夫を行ったが、立場の本質を捉えることができず、誤った解釈をしてしまい、中心発問とはかけ離れた回答もみられた。

このことから、授業展開においては、授業の導入の段階で、生徒にこれまでの既習事項の振り返りを行いながら、本時のテーマとなる問いを理解させた上で、「対話的な学び」を行うなど、導入－展開－まとめのそれぞれの段階で、生徒に何を伝え、何を考えさせるのかを想定して授業展開を組み立てるべきである。

3 適切な資料の精選及び提示方法

社会科は多くの資料を活用する教科である。本研究では、視点を生徒に提示する資料の精選及びその提示方法の重要性を改めて感じた。中心発問の解答に至るまでの学習過程において、教師がどの資料を、どのような順番で生徒に提示するのかという点は特に留意すべきことであり、生徒に学習内容を理解させるための重要な要素の一つであると考えられる。

また、生徒の「対話的な学び」を円滑にするためにも、「社会的な見方・考え方」の視点を明確にし、多面的・多角的に捉えることができる資料を用いることも重要である。

このように、生徒の思考力・判断力・表現力を高めるための土台となる資料の取り扱いについては、今後も研究課題となるであろう。

4 校種の接続を意識した「社会的な見方・考え方」の視点の整理

本研究においては、検証授業で「社会的な見方・考え方」を重視した「対話的な学び」を取り入れた手法を用いた授業に係る検討を行ってきたが、小学校と高等学校との接続を意識し、社会的な見方・考え方を整理する段階まで至らなかった。全ての校種全体で社会的見方・考え方を俯瞰し、発達段階に応じて、児童・生徒の社会的見方・考え方が育成できるように整理し、その妥当性を検証する必要がある。

平成28年度 教育研究員名簿

中学校 ・ 社会

学校名	職名	氏名
中央区立佃中学校	教諭	伊東賢治
中野区立緑野中学校	主任教諭	山北大地
北区立堀船中学校	主任教諭	島貫勝義
足立区立第十四中学校	主任教諭	中尾学
葛飾区立大道中学校	主任教諭	若松徹哉
江戸川区立鹿本中学校	◎主任教諭	坂西勉
小金井市立南中学校	主任教諭	中島健介
小平市立小平第五中学校	主任教諭	山下大輔
東村山市立東村山第二中学校	主任教諭	鈴木勝博

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部指導企画課
指導主事 西尾英里子

平成28年度

教育研究員研究報告書
中学校・社会

東京都教育委員会印刷物登録

〔平成28年度第142号〕

平成29年3月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 株式会社オゾニックス